

# Case Study

支部ケース・スタディ

中国支部

## 開局から四半世紀 映画「風の島」制作までの道のりと思い

### Kビジョン(株)

放送制作部 部長

宗森 達司



瀬戸内の自然豊かな小さな島で暮らす一人の少女の成長を描く映画「風の島」。2022年8月19日に全国公開するこの作品は、地域とのつながりやケーブルテレビ局としての在り方を考える私たちにとって大切な作品となりました。

### 映画制作の道のり

1995年に開局して以降「地域とともに」を企業テーマに掲げ、電話やインターネットサービス、コミュニティチャンネルでの番組制作に取り組んできました。現在の番組制作や映画制作につながる大きな転機が訪れたのは、2013年のことです。地元・下松市で地域の活性化や映像文化の向上を目的とした下松フィルム・コミッションが設立され、弊社も運営委員会のメンバーになりました。設立した



今年8月19日に全国劇場公開される「風の島」

年には映画「OYAKO-present to the future-」のロケ支援を行い、設立翌年の2014年には、岡田奈々さんを主演に迎えて初めての自主制作映画となる作品、下松市市制施行75周年記念映画「恋」を制作しました。

その後制作した自主制作作品2作目となる「10ミニッツ」は、第6回知多半島映画祭コンペティション部門でグランプリ、第11回札幌国際短編映画祭インターナショナル・コンペティション作品部門ナショナルプログラムで観光庁長官賞、第15回中之島映画祭コンペティションでグランプリを受賞しました。その後も2016年に「大城湯けむり狂騒曲」、2018年に「ただいま!」、2019年に下松市市制施行80周年記念映画「くだまつの三姉妹」を制作。手探りの中で始まった映画制作でしたが、「10ミニッツ」での受賞を通して多くの人に作品を見てもらえたという喜びが、その先の活動の大きな活力となったことは間違いありません。地元の魅力を映画を通して発信し続けてきました。

### 映画がつないだ縁

2019年、元木行哉さんという一人の俳優が東京から下松市へ移住してきました。弊社ではその翌年の2020年4月に元木さんを主演に迎えた自主制作番組・地域発信型ドラマ「たべものがたり 元木食堂」の放送がスタート。これまでも飲食店を紹介する番組は制作してきましたが、映画制作という経験を通じ、何か新しい形を見い出せないかと月1ドラマの制作に挑戦しました。撮影した飲食店や視聴者の方からの反響も大きく、現在はSeason3を放送中で、弊社の看板番組の一つとなりました。

そもそもなぜ、元木さんが下松市に移住してきたのか。そのきっかけは下松市での映画制作でした。元木さんは下松フィルム・コミッションとして初めて映画制作に関わった作品「OYAKO」で主演を務め、以降フィルム・コミッションが制作した多くの作品に出演しています。その際に感じた下松市という土地や人の魅力、そこでできた多くの人との縁が下松市への移住を決心させたといいます。さらに映画「10ミニッツ」で脚本を担当し、出演もしている室積光さんは、現在「たべものがたり 元木食堂」で監督・脚本を務めています。下松市の

隣に位置する光市在住で、俳優として「3年B組金八先生」や「マー姉ちゃん」などに出演し、作家としても数々の作品を手がけてきました。そのうちの一作「都立水商！」はドラマ化もされました。映画でのご縁からその道のプロとタッグを組んでの番組制作が実現しました。

## 文化をつくり、文化を育てる

弊社は2020年に開局25周年を迎え、その記念に何かできないかとイベントの開催などを企画していましたが、新型コロナウイルスが猛威をふるいはじめ、人が集まることは避けようと断念。地域の人と一緒に祝うことができないなら、何か記念に残るものを制作しよう。その思いで生まれたのが映画「凧の島」です。これまでに培ってきた映画制作のノウハウと、そこで生まれた多くの人との縁を集結させて、地元の魅力を多くの人に発信できる作品を作ろうとプロジェクトが動き始めました。私たちが開局記念という節目に映画制作という道を選んだ理由は、これまでの映画制作の経験と、ケーブルテレビ局としての強みが生かせるという自負があったからです。

映画制作は撮影地の協力が必要不可欠です。ロケ地となる場所を貸していただいたり、キャストやエキストラとして出演していただいたり、何百人という人を巻き込み支えてもらい、それがあってはじめて1本の映画が完成します。下松市では2013年から積み重ねてきた映画制作の実績があり、市民の皆さんにとって映画制作というものが身近になってきたのでしょう。プロデューサーという立場上多くの方と接する機会がありましたが、映画制作を重ねるたびにロケ地の提供や出演に関して快く協力して下さる方が増えてきているという実感がありました。これは映画制作を継続してきたからこそ下松市での変化だと思います。下松フィルム・コミッションの立ち上げにより映画制作という土壌ができました。自主制作に挑戦してその土壌に種を撒き、受賞という評価は種にとって大きな栄養となりました。作品作りを続けて生まれた小さな芽は、多くの人に作品を見てもらうことによりすくすくと育ってきました。そうして地域とともに育まれてきた文化の芽を摘むことなく、もっと大きな木へと育て花を咲かせたい。全国ロードショーの映画制作にはそんな願いも込めました。

### 〈「凧の島」制作の様子〉



レストランでの撮影



教室での撮影



船の上での撮影



台船での撮影



長澤雅彦監督

今回の映画の撮影の準備が始まるとロケ地やキャスト、舞台中で使用する小道具、とにかく決めなければいけないことが多く目まぐるしい日々が続きました。ですが、そんなときに「すみません、ちょっとご相談が…」とこれまで取材先でお世話になった方に電話をすると「できることがあるなら協力する」「Kビジョンが言うならやってみよう」と力強いお言葉をいただき、どれだけ救われたかわかりません。ケーブルテレビ局としての強みは、こうした支えてくれる地域の人々の存在があり、25年間かけて紡いできた地域との強いつながりがあることです。だからこそ、私たちは地域の人たちに喜んでもらえる作品やコンテンツを作らなければ。改めて四半世紀の道のりを振り返り、誓いを新たにしました。

#### 〈地域発信型ドラマ「たべものがたり 元木食堂」制作の様子〉

### 私たちの「ものづくり」とは

「たべものがたり 元木食堂」でも映画と同じく元木さん以外の出演者やエキストラの多くは地元の方です。あるとき地元の劇団員で度々ドラマに出演して下さっている1人の女性にこんな言葉をかけられました。「お芝居をしたくてもなかなか機会がなく、あきらめるしかない私たちに芝居をする機会をくれてありがとう」。胸が熱くなりました。私たちのものづくりは決して間違いではないのだとそう思わせてくれた瞬間でもありました。

嬉しい、楽しい、感動した一。そう誰かの心を動かし、心を豊かにするものが「文化」であり、ケーブルテレビ局としてコンテンツを届ける私たちのものづくりとは、文化を作ることなのだと思います。



主演の元木行哉さん



元木さん、室積さんと地元のキャスト



撮影中の様子



映像チェック中のスタッフ



出演してくれた子どもたち

### 映画「凧の島」の公開を控えて

映画「凧の島」の撮影は2021年9月におよそ20日間かけて行われました。山口県は新型コロナウイルス感染拡大防止集中対策期間だったため、キャスト・スタッフ全員のPCR検査の実施、毎日の検温結果の報告、食事は1日3食完全個食、さらにバブル方式をとりスタッフも移動制限をして撮影地近くの施設に宿泊して外部との接触を断ち、宿泊施設との往復に行動を制限して撮影を行いました。家族にも会えず撮影に打ち込んだ20日間はスタッフにとっても苦勞の多い時間だったと思いますが、地域に支えられ感謝し続けた20日間でもありました。

感染者を出すことなく無事に撮影を終え公開を間近に控えた今一。私たちが“地域とともに過ごした25年間”が詰まった作品が、1人でも多くの人に届きますように。そう願っています。